

日蓮大聖人御書全集

やげんたどのごへんじ

弥源太殿御返事

新版
1698
〜
1700

やげんたどのごへんじ

弥源太殿御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

ほうじようやげんた

文永11年('74) 2月21日

53歳

北条弥源太

にちれん

にほんだいいち

びやくにん

ゆえ

みなひと

そもそも、日蓮は日本第一の僻人なり。その故は、皆人

ふぼ

高

しゆくん

だいじ

そうろう

の父母よりもたかく主君よりも大事におもわれ候ところ

あみだぶつ

だいにちによらい

やくしとう

ごしんよう

ゆえ

さんさいしちなん

の阿弥陀仏・大日如来・薬師等を御信用ある故に三災七難

せんだい

てんぺんちようとうむかし

過

もう

ゆえ

けつく

先代にこえ天変地天等昔にもすぎたりと申す故に、結句は

こんじよう

み

滅

くに

損

ごしよう

だいあびじごく

今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻地獄

お たも

いちにちかたとき

弛

呼

ゆえ

に堕ち給うべしと一日片時もたゆむことなくよばわりし故

だいなん

遭

たと

なつ

むし

ひ

飛

焼

に、かかる大難にあえり。譬えば、夏の虫の火にとびくばり、

鼠 猫 前 い

ねずみがねこのまえに出でたるがごとし。これあに我が身

し ようじん ちくしょう しんみょう うしな

を知つて用心せざる畜生のごとくにあらずや。身命を失

こころ い びやくにん

うこと、しかしながら心より出ずれば僻人なり。

いし たま 含 ゆえ 碎 しか ひにく ゆえ ころ

ただし、石は玉をふくむ故にくだかれ、鹿は皮肉の故に殺

うお 味 ゆえ 獲 翠 はね ゆえ 破

され、魚はあじわいある故にとらる、すいは羽ある故にやぶ

によにん 見 目 形 かなら 妬 こころ

らる、女人はみめかたちよければ必ずねたまる、この意な

にちれん ほけきよう ぎようじや ゆえ さんるい ごうてき

るべきか。日蓮は法華經の行者なる故に、三類の強敵あつ

しゅじゅ だいなん 遭 もの でしだんな

て種々の大難にあえり。しかるに、かかる者の弟子檀那と

たも ふしぎ さだ しさいそうろう あいかま

ならせ給うこと不思議なり。定めて子細候らん。相構え

て、能く能く御信心候いて、靈山浄土へまいり給え。

よ　よ　ごしんじんそうら

りようぜんじようど

詣

たま

ふた

また、御祈禱のために、御太刀、同じく刀、あわせて二

よく　たま

そうろう

たち

鍛　治　つく

そうろう

つ送り給わつて候。この太刀は、しかるべきかじ作り候

おほ

そうろう

天

国

おに　切

八

かと覚え候。あまくに、あるいは鬼きり、あるいはや

劍

いちよう

干

将

莫

耶

つるぎ

異

つるぎ、異朝にはかんしよう・ばくやが劍に、いかでかこと

ほけきよう

進

たも

との

おん　持

とき

なるべきや。これを法華經にまいらせ給う。殿の御もちの時

あく

かたな

いま

ぶつぜん

ぜん

かたな

たと

は悪の刀、今、仏前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬え

おに

どうしん

発

ふしぎ

ば、鬼の道心をおこしたらんがごとし。あら不思議や、

ふしぎ

ごしよう

かたな

杖

恃

たも

不思議や。後生にはこの刀をつえとたのみ給うべし。

ほけきよう　さんぜ　しよぶつほつしん　杖　そうろう

法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。ただし、

にちれん　杖　柱　侍　たも　陰　やま　悪

日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あしき

みち　杖　倒　こと　て　引　杖　柱　転

道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬればまろ

なんみようほうれんげきよう　しで　やま　杖　柱

ぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえはしらと

たま　しやかぶつ　たほうぶつ　じようぎようとう　しぼさつ　て　と　たも

なり給え。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給

にちれん　先　た　そうら　おんむか　そうろう

うべし。日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり候こと

先　い　たま　にちれんかなら　えんま

もやあらんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮必ず閻魔

ほうおう　くわ　もう　そうろう　すこ　虚　ごと

法王にも委しく申すべく候。このこと少しもそら事あるべ

にちれん　ほけきよう　もん　つうそく　あんないしや

からず。日蓮、法華経の文のごとくならば、通塞の案内者な

いっしん しんじん

りようぜん

ご

たま

銭

り。ただ一心に信心おわして靈山を期し給え。ぜにという

よう

へん

ほけきよう

ものは用にしたがって変ずるなり。法華經もまたまたかく

闇

ともしび

わた

ふね

のごとし。やみには灯となり、渡りには舟となり、ある

みず

ひ

たも

いは水ともなり、あるいは火ともなり給うなり。もししか

ほけきよう

げんぜあんのん

ごしようぜんしよ

おんきよう

らば、法華經は「現世安穩、後生善処」の御經なり。

うえ

にちれん

にほんこく

なか

あんしゆう

者

そう

その上、日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて

か

くに

てんしやうだいじん

住

初

たま

くに

彼の国は天照太神のすみそめ給いし国なりといえり。かし

にほんこく

探

い

たも

くにみ

廚

こにして、日本国をさぐり出だし給うあわの国御くりやな

くに

いっさいしゆじよう

じぶ

ひも

り。しかもこの国の一切衆生の慈父・悲母なり。かかるい

くに

さだ

ゆえ

そうろう

しゆくじゆう

みじき国なれば、定めて故ぞ候らん。いかなる宿習に

そうろう

にちれん

か くに う

だいいち

かほう

てや候らん、日蓮また彼の国に生まれたり。第一の果報な

しょうそく

せん

くわ

書

るなり。この消息の詮にあらざれば、委しくはかかず。た

推

量

たも

だ、おしはかり給うべし。

よ

よ

しよてん

祈

もう

しんじん

飽

能く能く諸天にいのり申すべし。信心にあかなくして、

しよがん

じようじゆ

たま

にようぼう

語

たま

所願を成就し給え。女房にもよくよくかたらせ給え。

きようきようきんげん

恐々謹言。

にがつにじゆういちにち

二月二十一日

にちれん

かおう

日蓮

花押

やげん たどのごへんじ

弥源太殿御返事

